

三修
大新

大藏經

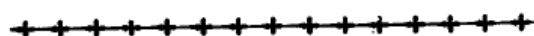
索引

第35冊

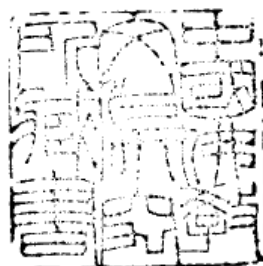
續律疏部

新大豐出版公司 影印

大新正修 大藏經索引



第三十五冊
續律疏部



新文豐出版公司 影印

大正 大藏經索引 第35冊 續律疏部

中華民國81年4月台1版

精1冊基價15.7元

編集者：大藏經學術用語研究會

發行者：高 本 釗

發行及：新 文 豐 出 版 公 司
印刷所

公 司：臺 北 市 雙 園 街 9 6 號

電 話：3 0 6 0 7 5 7 · 3 0 8 8 6 2 4

門市部：臺北市羅斯福路一段20號8樓

電 話：3 4 1 5 2 9 3 · 3 4 1 5 2 9 4

台 北 郵 政 3 6 4 3 信 箱

登記證：局版臺業字第0649號

郵政劃撥：0 1 0 0 4 4 2 6 號

ISBN 957-17-0447-4 (套)

ISBN 957-17-0451-2 (第三十五冊：精裝)

出 版 說 明

本「大正藏續編索引」第三二至四八冊係根據大正新修大藏經續編第五六至八五冊所作諸內容索引，這是日本大藏經學術研究會邀請六所佛教大學——立正、大谷、大正、龍谷、駒澤、高野山等負責編撰本索引，深獲各界好評，特此推介學林，以公諸讀者。

凡其五五冊正編部份所作三一冊索引，業於民國六十九年景印刊行，屢經讀者多方詢問：何時得以全部出齊，以利學者應用；經數年來考核評量，並得鄰國日本諒解，為使此國際性工具書，俾以完整面目提供學者使用，特此全數景印，有了這部索引，任何問題都可以迎刃而解，可知此部索引存在價值是何等珍貴，謹此說明。

本公司編輯部 謹啟壬申年元月

簡介研讀大藏經的工具書

楊白衣

～法寶總目錄與大藏經索引之功用～

研讀大藏經是每一位佛子嚮往的終身大事，不研究則已，若想研究，則非賴特殊工具書莫辦。過去研究佛學，一、靠辭典，二、靠年表，三、靠經書目錄，但這些工具書已無法收到事半功倍之效，勢必另覓他途解決。

日本學者對此提供了最有力的工具書二種，其嘉惠學界之深，誠令吾人嘆為觀止！此二種工具書，一曰『法寶總目錄』，一曰『大藏經索引』。案此二部書之主要功用如下：

一、法寶總目錄之功用可查下列事項：

- (一)知著者而不知其著作。
- (二)知經書而不知著者、譯者。
- (三)知經書而不知有無異譯本。
- (四)知經書而不知何代、何年、何人之著譯。
- (五)知經書而不知內容章節。
- (六)知經書而不知在何處（第幾冊、幾頁）
- (七)知經書而不知有無前人之註解。
- (八)查著譯者之籍貫、俗姓、生卒年。
- (九)查經書之原名、漢譯名、日譯名。
- (十)查經書在各種版本之歸屬。

二、大藏經索引之功用有下列事項：

- (一)查法相、名數之所在以及定義等。
- (二)查人名、地名等所有固有名詞之原名，出現次數以及同名異人。
- (三)查某一術語在某一部經書中之用例、定義、異名及在各宗派中之觀點。
- (四)查五十種分類項目（詳如下表）之所在以及佛教的人生觀、宇宙觀。
- (五)查典籍之解題以及在國際上現今的研究成果。
- (六)查每冊藏經之詳細內容以及佛教之觀點。

『法寶總目錄』共三巨冊，除檢查上述各種要目之外兼有經錄的性質，不但收錄了各版本藏經，如『明藏』、『卍藏』、『卍續藏』等目錄，以及名庫所藏之書目，且有智旭大師的『閱藏知津』與陳實的『大藏一覽集』，可查每一部經律論（一七七三部）之解題、音義、傳記、疏鈔、目錄、纂集、護教、序讚、詩歌等，極為方便。

『大藏經索引』是根據日本『大正新修大藏經』（中華文化會館及新文豐出版公司影印之大藏經）前五十五冊所作之內容索引，這是日本大藏經學術研究會邀請六所佛教大學負責編撰的索引。其索引之計劃工作本以名學者小野玄妙博士（佛書解說大辭典作者）為中心，從民國三十二年開始著手，並已刊行了阿含部、目錄部、法華部各乙冊。這個計劃後來由於博士之逝世和第二次世界大戰之影響而不得不告中斷。直到民國四十五年由大谷大學、高野山大學、駒澤大學、大正大學、立正大學、龍谷大學等六所佛教大學重新提議，計劃把『大正新修大藏經』中之印度、中國、日本等三國選述之部分共計八十五冊之內容作成索引四十八冊以利學者應用。這六所佛教大學合議之結果，組成大藏經學術用語研究會，對內容的分類項目先行檢討後，決定以下列的原則展開工作。

一、以小野玄妙博士之計劃為藍本，分為分類項目別索引、音次索引、字劃索引、四角號碼索引、梵語索引、使其成為國際性之工具書。

二、用語之選擇，以漢譯大藏經為準，以總合研究之方法，每頁選出五十個學術用語，而把它配於五十種分類項目。五十種分類項目，以印度撰述部分為中心，而每項目之下再細分若干細目，其詳目如下：

1. 教 說：經典分類名目（三藏、九分教、十二分教等）……a通說 b三藏 c九分教 d十二分教
2. 教 判：有關大乘小乘，一乘三乘，密宗及各宗判教之用語……a通說 b大小乘 c一三乘 d各說
3. 教 理：表示教理之用語如三法印、空、中、緣起、佛性、如來藏等……a通說 b各說
4. 法 相：有關構成宇宙萬象的現象與本體之用語，與五位諸法有關連的名稱……a通說 b色法 c心法 d非色非心法
5. 惑 業：有關說明輪迴的惑障，業道之用語（除緣起、因果）……a通說 b惑 c業 d苦
6. 行 位：表示修行道位及得果的有關斷惑證理之用語……a通說 b凡夫位 c聲聞緣覺位 d菩薩位

- 7.戒 律：有關戒律之種類、細目、持犯等之用語……a通說 b各說
- 8.禪 觀：有關一般禪定、三昧、觀法之用語……a通說 b禪定 c觀法
- 9.世 界：有關三界、六道等之用語……a通說（包括三界六道，二十五有）b天 c
大 d地獄 e餓鬼 f畜生 g阿修羅 h其他
- 10.佛 土：有關佛的德性、身土、佛名、諸尊之用語……a通說 b德性 c佛身 d佛
土 e佛名 f諸尊
- 11.人 名：按照身分分類之固有名詞……a比丘比丘尼 b優婆塞優婆夷 c仙人 d外
道 e菩薩 f其他
- 12.教 派：有關學派、宗派之用語……a學派 b宗派
- 13.教 團：有關僧伽、教團之法規及僧階之用語……a通說 b法規 c僧階 d其他
- 14.寺 院：有關寺院之用語……a通說 b各說
- 15.信 仰：有關各種信仰之用語……a通說 b各種信仰（包括稱名唱題等）
- 16.儀 禮：有關佛事及僧眾等一般儀式、作法之用語……a通說 b佛事 c作法 d僧
眾行儀
- 17.事 相：有關密宗四度加行、灌頂行法之用語……a通說 b行法 c四度加行 d護
摩 e灌頂 f其他
- 18.曼 茶 羅：有關密宗行法修行之本尊曼茶羅之用語……a通說 b各說
- 19.印 契：有關密宗於行法時結印契（手印）之用語……a通說 b各說
- 20.陀 羅 尼：有關陀羅尼之用語……a通說 b真言（純密） c其他
- 21.外 教：有關婆羅門教，印度諸學派、儒教、道教、神道之用語……a通說 b婆羅
門 c印度諸學派 d儒教 e道教 f神道 g其他
- 22.咒 術：有關幻化、咒術之用語……a通說 b幻化 c咒術
- 23.天文曆數：有關天文、時節、方位、算數、度量衡之用語……a通說 b日月星宿 c氣
象 d時分 e歲月 f宿曜曆及吉凶日 g方位 h算數 i度量衡
- 24.地 理：有關地理、地名之用語……a通說 b地名 c山名 d水名 e園林名
- 25.動 物：有關動物之用語……a通說 b各說
- 26.植 物：有關植物之用語……a通說 b各說
- 27.鑛 物：有關鑛物之用語……a通說 b各說
- 28.物 理：認為與物理，化學有關之用語……a通說 b色 c形狀 d聲音 e光熱
- 29.論 理：有關因明，論理學之用語……a因明 b論理。

- 30.心理：認為與心理學有關之用語
- 31.倫理：有關倫理、道德之用語（例如恩義等）
- 32.教育：有關教育之用語。
- 33.生理衛生：有關生理與衛生之用語……a通說 b身體 c出生 d生理 e衛生
- 34.醫術藥學：有關醫術、藥學之用語……a通說 b療法 c病名 d藥
- 35.民族：有關民族、種族之用語……a民族 b種族 c其他
- 36.社會：有關家族、身分、階級等之用語……a通說 b家族 c身分 d階級 e其他
- 37.政治經濟：有關政治、法制、軍事、經濟之用語……a通說 b行政 c法律 d財政 e軍事
- 38.產業：有關一般職業之用語……a通說 b職業
- 39.風習：有關飲食、衣服、風俗之用語……a通說 b食物 c調味料 d飲料 e衣服 f裁縫 g風俗 h娛樂
- 40.言語：有關語言之種類、文字、文法、翻譯之用語以及梵語，巴利語等之音譯名詞……a通說 b種類 c文字 d文法 e翻譯 f音譯名詞 g其他
- 41.名數：以數目合成之用語
- 42.典籍：有關一般典籍之用語（包括品名）
- 43.紀年：有關年號、干支、王朝等之用語
- 44.文藝：譬喻、因緣、詩頌等與文藝有關之用語……a通說 b本生 c因緣 d譬喻 e文疏 f詩偈
- 45.音樂：有關音樂之用語……a通說 b音聲律呂 c調子 d聲譜 e典目 f樂器。
- 46.建築：有關建築之用語……a通說 b種類 c規模 d技法 e堂舍
- 47.圖像：有關佛、菩薩等的繪畫、彫刻之用語……a通說 b繪畫 c彫刻
- 48.工藝：有關美術工藝之用語……a通說 b題目 c形像 d素材 e技巧
- 49.器物：有關器具、佛具之用語……a通說 b佛具 c器具
- 50.雜語：不屬於上述四十九項目之詞彙

六家大學的分擔情形，到目前為止已出版者如下：

甲、印度撰述部

索引第一冊	阿含部	駒澤大學	大正藏第一、二冊
索引第二冊	本緣部	高野山大學	大正藏第三、四冊
索引第三冊	般若部	大正大學	大正藏第五～八冊

索引第四册	法華涅槃部	龍谷大學	大正藏第九、第一二册
索引第五册	華嚴部	龍谷大學	大正藏第九、一〇册
索引第六册	寶積部	大谷大學	大正藏第一一、一二册
索引第七册	大集部	龍谷大學	大正藏第一三册
索引第八册	經集部(上)	駒澤大學	大正藏第一四、一五册
索引第九册	經集部(下)	大谷大學	大正藏第一六、一七册
索引第一〇册	密教部(上)	高野山大學	大正藏第一八、一九册
索引第一一册	密教部(下)	大正大學	大正藏第二〇、二一册
索引第一二册	律部(上下)	駒澤大學	大正藏第二二~二四册
索引第一三册	釋經論部中觀部	駒澤大學	大正藏第二五、二六、三〇册
索引第一四册	毘曇部(上)	立正大學	大正藏第二六~二八册
索引第一五册	毘曇部(中)	龍谷大學	大正藏第二六~二八册
索引第一六册	毘曇部(下)	大谷大學	大正藏第二九册
索引第一七册	瑜伽部(上下)	立正大學	大正藏第三〇、三一册
索引第一八册	論集部	龍谷大學	大正藏第三二册

乙、中國選述部

索引第一九册	經疏部(一)	大正大學	大正藏第三三、三四册
索引第二〇册	經疏部(二)	大谷大學	大正藏第三五、三六册
索引第二一册	經疏部(三)	龍谷大學	大正藏第三七、三八册
索引第二二册	經疏部(四)	高野山大學	大正藏第三八、三九册
索引第二三册	律疏部論疏部(一)	龍谷大學	大正藏第四〇、四一册
索引第二四册	論疏部(二)	大谷大學	大正藏第四二~四四册
索引第二五册	諸宗部(一)	立正大學	大正藏第四四、四五册
索引第二六册	諸宗部(二)	大正大學	大正藏第四六、四七册
索引第二七册	諸宗部(三)	駒澤大學	大正藏第四七、四八册
索引第二八册	史傳部(上)	大谷大學	大正藏第四九、五〇册
索引第二九册	史傳部(下)	龍谷大學	大正藏第五一、五二册
索引第三〇册	事彙部外教部	高野山大學	大正藏第五三、五四册
索引第三一册	目錄部	立正大學	大正藏第五五册

丙、日本撰述部

索引第三二冊	續經疏部(一)	立正大學	大正藏第五六、五七冊
索引第三三冊	續經疏部(二上)	高野山大學	大正藏第五八、五九冊
索引第三四冊	續經疏部(二下)	高野山大學	大正藏第六〇、六一冊
索引第三五冊	續律疏部	駒澤大學	大正藏第六二冊
索引第三六冊	續論疏部(一)	大谷大學	大正藏第六三~六五冊
索引第三七冊	續論疏部(二上)	龍谷大學	大正藏第六五、六六冊
索引第三八冊	續論疏部(二下)	龍谷大學	大正藏第六六~六八冊
索引第三九冊	續論疏部(三)	龍谷大學	大正藏第六八~七〇冊
索引第四〇冊	續諸宗部(一)	立正大學	大正藏第七〇、七一冊
索引第四一冊	續諸宗部(二)	大谷大學	大正藏第七二~七四冊
索引第四二冊	續諸宗部(三上)	大正大學	大正藏第七四~七七冊
索引第四三冊	續諸宗部(三下)	高野山大學	大正藏第七七冊
索引第四四冊	續諸宗部(四)	高野山大學	大正藏第七八、七九冊
索引第四五冊	續諸宗部(五)	駒澤大學	大正藏第八〇~八二冊
索引第四六冊	續諸宗部(六)	大谷大學	大正藏第八三、八四冊
索引第四七冊	古逸部、疑似部	駒澤大學	大正藏第八五冊
索引第四八冊	悉曇部	大正大學	大正藏第八四、八五冊

本索引之最大特色為站在最新的研究成果，以梵文、巴利文等音譯，固有名詞為中心，盡量地附註羅馬字拼音的原文。

『大藏經索引』用途之大，吾人得由五十種分類項目窺見一斑，於此不但可見佛法大海之廣闊無邊，且能證明佛法之多面性格，其內容有人文科學、社會科學、自然科學，應有盡有。以前吾人研究佛學總有望洋興嘆，不知所措之感，現在有了這部索引，任何問題都可迎刃而解，吾人可隨意查閱自己所欲了解之事項。於此不但可查出該用語在大藏經中的所在（頁數），亦可比照各宗派對該問題之看法。不像已往想查尋一個問題往往得花費許多時間，仍無法解決問題，至於想比較研究那就更困難了。例如：有關「業」與「輪迴」之問題來說，可將原始佛教、部派佛教、大乘佛教中較代表性之經論，如：阿含經、俱舍論、成業論、中觀論等之有關「業」與「輪迴」之記載，依索引的指示抄錄出來，然後加以研究原義以及發展的過程。這豈不是輕而易舉之事。在未有索引以前吾人必須讀破整部經典，方能洞悉該問題之所在，而且仍無法收集完整的資料。

又例如吾人想知道佛教對生理衛生的看法，對國家、社會的看法，則可隨便找一本索

引，查閱有關這些問題之所在，然後找某一部經論研讀。這在以前是做夢也想不到的事，由此可知這部索引之存在價值是何等地珍貴了。

總之，研究佛學『法寶總目錄』與『大藏經索引』為學者不可缺的重要工具書。

收 録 典 籍 解 題

本書は、大正新脩大藏經第六十二卷續律疏部の索引であり、次に掲げる典籍が収録されている。

經典番號	典籍名	撰述者名
No. 2246	梵網經開題（一卷）	日本 空海撰
No. 2247	梵網戒本疏日珠鈔（五十卷）	日本 凝然述
No. 2248	資行鈔（二十八卷）	日本 照遠撰

インドで成立した各部派ごとの三藏は、その後周邊諸地域へと傳播して行くが、中國へ將來されたものは、各部派ごとに三藏がまとまった形で流入し翻譯された譯ではなかつた。特に律藏は廣律が譯出される以前には、系統的に組織だつた傳來ではなかつた。

漢譯の諸典籍は、その譯語の變遷から、古譯、舊譯、新譯の三期に區分されるが、戒律關係の典籍の場合には、その區分の標準となるものは譯者・譯時の確實な「五大廣律」である。廣律は分量が大きいので、譯出が容易でなかつたことから譯出時の事情なども比較的正確に伝えられていると見なされるからであり、またそれらの譯出後には、その律典の研究者が現われ、註釋書や研究書が相次いで著述され、またそれに基づく學派が形成されるに至っている。廣律の譯出以前の古譯時代においても、中國各地を據點として成立した佛教徒集團ないし出家集團が同一の戒律に依つて生活規制されるといつたような一元的な教團ではなく、特に初期の段階では、インドにおける具足戒の完全な受容はできなかつた。しかし無秩序ながら大小乗の經典・論書と共に戒律に關する典籍が漢譯されるに従い、如法に受戒できるほどの僧團が徐々にではあるが形成されていつた。

次の舊譯時代になると事情は大きく變り、四大廣律が譯出されるに至つた。さらに最後の廣律である根本說一切有部毘奈耶が義淨によつて將來・譯出されたが、これは勿論新譯時代になつてからである。大正新脩大藏經に所收の五大廣律を譯出順に示すと以下の如くである。

五大廣律（略稱）	譯 者	譯出年代	部 派
十 誦 律（六十一卷）	羅 什 等	(A. D. 404~409年)	有 部

四分律（六十卷） 佛陀耶舍（A.D. 410～412年）法藏部
竺佛念等

摩訶僧祇律（四十卷） 法顯（A.D. 416～418年）大衆部
佛陀跋陀羅

五分律（三十卷） 佛陀什、慧嚴（A.D. 422～423年）化地部
竺道生等

有部毘奈耶（五十卷） 義淨（A.D. 703～710年）根本有部

舊譯時代になつて事情が一變したというのは、まず譯文のみによつて意味が通ずるようになったこと、また律の主要術語が四大廣律の間で密接な類似が見られ、それ以前のおよび以後の新譯とはつきり區別できることである。つまり十誦律の譯出で採用された譯語は後續の三大廣律にほとんど踏襲され、さらにそれ以後の主要な律典もこれになつたので、舊譯時代の律典の譯語は統一され、また十誦律において作られた律特有の表現も一定して用いられているのである。この事は、單に各種の律典譯出の新舊を判斷する標準として有効なだけではなく、十誦律の譯出に参加した弗若多羅（Puṇyatāra）、曇摩流支（Dharmaruci）、卑摩羅叉（Vimalākṣa）等は律に大いに通曉せるものであり、譯文の文體に指導的な役割を果たしたのは羅什（Kumārajīva）であろうから、これによつて律典翻譯の型が作り上げられるに至つた點も重要である。

一方玄奘の新譯の影響を顯著に受けることになつた義淨譯の根本有部律は、これらとは異なり新しい文體を作り出した新譯の譯語であるため、舊譯の四大廣律との比較は容易であり、漢譯律典だけによつて戒律の實行や研究が可能になつた事から見ても、十誦律譯出の意義は極めて重要である。

上述の如く廣律が漢譯され、且つ持律の渡來僧などによつて講述されるにつれ、その註釋や研究が大いに進展するに至つた。まず初めに考究されたのは十誦律であり、僧祇律がこれに次いだ。しかるに五分律はあまり研究者がなく、四分律も最初期には、盛行とはならなかつた。後の光統律師慧光（468—537）が四分律研究講學の基礎となつた『四分律疏』、『羯磨戒本』、『僧制十八條』などを作り多くの弟子を育成したので盛んとなり、ために律宗中興と稱される。さらに法礪（569—635）、智首（567—635）がこれらを註釋し、終南山の道宣（596—667）が『四分律行事鈔』、『羯磨疏』、『拾毘尼義鈔』などを著わすに至り一派を形成した。いわゆる南山律宗であり、法礪の相部宗、懷素（625—698）の東塔宗がその後衰えたのに對し、中國律宗を代表する學統として榮えたことはよく知られるところである。この學統を承ける允堪（1005—1061）には、道宣の行事鈔に註した『會正記』、『戒疏發揮記』、『業疏正源記』、『毘尼義鈔輔要記』等を始めとする十部の著述があり、十本の記主と稱されるが、特に『會

正記』によつて南山宗中の會正宗の名を得た。その孫弟子に當る西湖靈芝寺の元照(1048—1116)は道宣の三大部に註し、その中『行事鈔資持記』四十二卷が會正記に對して異を唱えるものであつたから、ついに會正・資持の二宗に分れるに至つた。

一方、大乘佛教の中國流傳は小乘經典と並んで早くからあつたが、特に般若思想は三國時代から西晉時代にかけて盛んとなり、また竺法護(230?—308)が、『般若』、『維摩』、『正法華』、『無量壽』、『十地』などの大乘經約150部を譯出して以來、道安、慧遠などの優れた指導者が現われ、また多數の渡來僧があり、入竺求法者による受容も盛んとなつた。羅什が長安に入つたのは後秦弘始三年(401)とされるが、翌年より同十四年にかけて、『般若』、『維摩』、『十住』、『法華』、『無量壽』などの諸經、『中論』、『百論』、『十二門論』、『大智度論』、『十住毘婆沙論』、『成實論』など各種の論書を譯出し、門下三千人と稱せられた。また佛駄跋陀羅(Buddhabhadra)は『華嚴經』などを譯出(418—420)し、曇無讖(385—433)は『涅槃經』、『菩薩持地經』、『菩薩戒經』などを譯出した。かくして法華經を中心として立宗した天台智顗(538—597)や華嚴宗大成者の賢首法藏(643—712)に至つて『梵網經』の疏が作られたが、梵網經そのものはインドで作られたものではなく、五世紀の中國撰述であり、また同じように中國、日本で重要視された『菩薩瓔珞本業經』も五、六世紀頃の中國撰述とされている。

以上略述してきたような基盤の上に展開した中國の大乘菩薩戒が、他の大乘經論と共に日本に流傳したのであり、五大廣律と共に日本佛教の戒律となつていつた。ただ、後述するように、日本では最澄によつて小乘戒が否定されたが、中國佛教においてはこのような事が明確に認められず、大小兼受または具足戒のみ受戒することが出家者の常であつたと見做される。勿論、この間の問題については、少くとも論議の對象となつたらしい點も窺われるが、正常な出家僧としては大乘菩薩戒のみという一派ないし集團が形成されたことはなかつたのである。

以上の如き戒律の流れの中で、本索引の對象となつた諸典籍が如何に位置づけられるかを要略すると、次の通りになるであらう。

1 空海の『梵網經開題』は、大正新脩大藏經第二十四卷律部三所收の『梵網經』(二卷)に對する、密教の立場からの解釋を示したものであり、空海の戒律に對する關心の中には、義淨譯の『根本說一切有部毘奈耶』も少なからず存したとされるから、當然これらも無視できない關係にある。

2 凝然の『梵網戒本疏日珠鈔』(五十卷)は、直接には賢首法藏の梵網經への註釋である『梵網經菩薩戒本疏』(六卷)〔大正新脩大藏經第四十卷律疏部所收〕に註釋せるものであり、法藏疏の編成に従いつつも他の多數の註釋類を參考にし、凝然自身の

梵網經理解を示したものである。

3 照遠の『資行鈔』(二十八卷)は、五大廣律の中で最も中國で研究依用せられた四分律に對する道宣の註釋である『四分律刪繁補闕行事鈔』(十二卷)〔大正新脩大藏經第四十卷律疏部所收〕および、それへの註釋である元照の『四分律行事鈔資持記』(十六卷)〔同上書所收〕とに對する註釋である。従つて四分律をば「分通大乘」とし、義は大乘に當るとして、大小乗戒の區別は受者の機根によると見るから、單に大乘菩薩戒とは別箇の四分律ではなくなる譯で、中國における大乘律典と大いに關係をもつことになる。元照もまた天台宗に學び、且つ淨土信仰に厚かつた人で、その南山律の解釋は法華經に依據しており、各種大乘經典を含む中國佛教へと連關するものである。

本索引の對象となつた以上の各典籍を、順次概觀して行くことにする。

No. 2246 梵網經開題(一卷)は、日本眞言密教の開祖空海が、古來羅什譯とされた『梵網經』上下二卷(大正藏第二十四卷所收)に對し、自らの解釋を示したものと知られている。日本佛教における戒律を考察するには、周知の如く天台系、律宗系、眞言律宗系の三系統の戒律觀史を研究する必要があるといわねばならない。『梵網經開題』は、その眞言律系の戒律觀を示すものの代表として、大正藏經に收録されているのである。空海の戒律觀を知るためには、當然のことながらその背景となる教學を究明する必要がある、また眞言律を宣揚している他の著述をも併せて考察しなければならないことはいうまでもない。

空海は全佛教を顯密二教に分類した。『辯顯密二教論』等に依れば、顯教とは釋尊が各人の宗教的素質に應じて説示した教えであり、その説示せる言葉は顯露、概略的であり、未だその眞實を盡していないとされている。それに對して、密教は絶對の大覺體である法身大日如來が、自受法樂のために眞實秘奧の教えを如實に開示せるものであり、顯教では到底説き得ざる大覺の内容をば、大日如來が眞實の言葉によつて説き明したものであると述べているのである。また空海は戒律の場合においても、總ての戒律を顯密二戒に分けている。所謂、弘仁四年の『遺誡』において、「佛道に趣向せんには戒に非ざれば寧んぞ到らんや。必ず須らく顯密の二戒堅固に受持して、清淨にして犯なかるべし。いはゆる顯戒とは三歸、八戒、五戒及び聲聞菩薩等の戒なり。四衆に各々本戒有り。密戒とはいはゆる三摩耶戒なり。亦是佛戒と名づけ、亦是發菩提心戒と名づけ、亦は無爲戒と名づくる等なり。」と述べ、顯密二戒と定義づけ、顯密二戒を受持すべきであると教示している。事實『三學錄』には、眞言宗所學の密戒

として、『蘇悉地經』3卷、『蘇婆呼經』2卷、『金剛頂受三昧耶佛戒儀』1卷を挙げ、顯戒としては、『根本說一切有部毘奈耶』50卷以下12部168卷の小乘有部律を挙げている。空海が、四分律によつて受戒したにも不拘、眞言宗所學の律として四分律ではなく、有部律を採用した理由として、密教の成立流行の地域が有部の律藏が榮えた地域と時代を一にすること、漢譯者義淨が密教的人物であり、その翻譯になる有部律が當時最も新しい律であつたので、空海は眞言宗を開宗するにつけそれを採用したこと、有部の有の思想が密教の妙有思想と密接な關連性を有していたことなどが、既に學者により指摘されているところである。

また、空海は『御遺告』の中でも、まず東大寺で具足戒を受け、その後の修行をへて密戒を受くべきことを説き、顯密二戒の併修を訓誡している。このような空海の立場は、最澄の如く南都の戒律を否定排斥することなく、それを肯定受容する態度を示している。

もちろん、密教の受戒の實際に於ては、眞言行者も出家者である以上、その出家の時點に於ては通佛教的な具足戒を受ける必要があるのは當然である。而して密戒は定められた修行を修了し、密教の秘儀である傳法灌頂入壇の際に受けるべき戒である。従つて、顯密二戒を受けるのは時期的にも意味内容的にも異なつてゐるのが實狀である。

さて、空海の説く密教独自の戒は、三昧耶戒といわれ、それは『大日經』、『大日經疏』、『受菩提心戒儀』、『無畏三藏禪要』、『菩提心論』等に依據して、更に『釋摩訶衍論』よりも重要な教説を採用して確立したものである。空海は『三昧耶戒序』に於て、三昧耶戒は法身大日如來所説の眞言曼荼羅教の戒であり眞言乘に入つて修行せんとする者は、まず(1)信心、(2)大悲心、(3)勝義心、(4)大菩提心の四種心を發さなければならぬと説き、次いで四種心の内容を解明している。この中第二の大悲心と第三の勝義心は、通佛教的なものであるが、第四の大菩提心は密教獨特の教學であつて、實踐觀法でもある。この觀法によつて即身成佛も可能となるのである。

さて三昧耶戒は別名發菩提心戒ともいわれている如く、菩提心を發することである。この菩提心の總體である信心の上に、別用である大悲心、勝義心、大菩提心を發することが三昧耶戒であつて、これに基づいて修行することが三昧耶戒を持することである。四種心は元來不可分のものであるが、便宜上分けて説明されているのであつて、本來一つの菩提心なのである。すなわち、空海は修行によつて、本有の菩提心が開顯されていくことを教示しているのである。

空海は三昧耶戒の精神を、『遺誡』の中で説いているが、それによれば、顯教の諸

戒は身三口四意三の十善戒に歸するが、この十善戒も所詮、心佛衆生の無差別三平等の觀に住する三昧耶戒に歸結すると言うのである。

空海の説く戒律は、心佛衆生の三平等觀に立脚し、本有の一心すなわち淨菩提心を戒體として、顯密の諸戒をその徳用行相として修し、衆生を教化する眞言秘密の三昧耶戒なのである。

さて次に『梵網經』の戒を一見し、さらにその『開題』によつて、空海の解釋をうかがつて行くことにする。

『梵網經』上下2巻は、具名を『梵網經盧舍那佛說菩薩心地戒品第十』と言い、先行の數種の戒經を参照して、5世紀中頃中國で成立した戒經であると見られている。上巻には、本經の教主は報身盧舍那佛であり、應化身である釋迦如來が覆述したものであるとし、菩薩の心地である四十法門品、すなわち菩薩の階位である十發趣心（十住）、十長養心（十行）、十金剛心（十回向）、十地の内容が説示され、下巻には、梵網戒と言われる十重禁戒と四十八輕戒の戒相が詳細に説き明かされている。以上のやうに『梵網經』は盧舍那佛を建て、「華嚴經」の説相と類似しているところから、古來、智顗が説く如く『華嚴經』の結經と判定されている。

この『梵網經』の戒は、梵網戒と言われる大乘獨自の戒で、菩薩の自覺に立つて菩薩道を行ずることを基調とし、佛性の開顯を目的とする佛性戒である點と、さらに梵網戒は眞俗通戒の菩薩戒であることを標榜している點に、その特徴が存する。

以上の如く、『梵網經』は小乘戒に對して大乘獨自の戒を別立強調しているために、大乘戒の精神の自覺と發揚に役立ち、ついに中國の大乘諸宗に依用されることになった。同様に日本においても、古來大乘菩薩戒の根本戒經として尊重され研究されてきたのである。

空海は『梵網經開題』において、この『梵網經』についての理解と解釋を簡潔直截にまとめて説示している。つまり空海は眞言密教の深秘の立場から『梵網經』の大意を述べ、それを『金剛頂經』の密教經典と見做して、密教的理解と解釋を示しているのである。『梵網經開題』の冒頭に「今此の蘇多覽を演ぶるに略して四の意あり。いはゆる大・三・法・羯なり。大は説と聽との二能の人。三は本標示。法は則ち能詮の教。羯は則ち事業威儀なり」と述べ、『梵網經』を四種曼荼羅に配し解釋する旨を説いている。四種曼荼羅は四曼相大と言われる如く、宇宙萬物の實在であり本體である六大體大より生起した諸存在の差別の形相であり、體大界の徳相であるとされる。空海は「梵網經」を、四種曼荼羅を開示具現した經典であるとみているのである。

「梵網經開題」では、本經を大曼荼羅身に配釋し、總ての教えの根源は法身說法であ